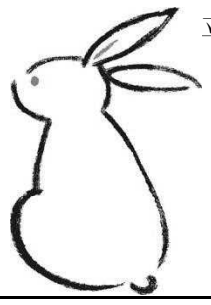
平川塾ニュースレターNo.8

2023年10月１日発行

〒558-0003　大阪市住吉区長居３－３－２５
メゾン住吉壱番館　１階－５
平川塾　06-6695-0181

Shiro-usagi

白兎・素兎



平川塾HP　アメブロ　YouTube

文責：平川　達三

母と子で源氏物語・枕草子

紫式部

生前のオフクロ様の大のお気に入りのひとつだったのは『源氏物語』でした。

高校生時代から50歳辺りまでのワタシにとって、古代日本語は読んでもほとんど意味が分からない、そもそも読むだけでも手こずらせる存在でしかなかったのです。

中でも、『宇治拾遺物語』がそうでした（今読むと、そんなに難しくないと感じます。実際、平安朝の作品群から見れば、読みやすくて分かりやすいのですが）。

古代日本語（古文）がどうしても好きになれなかったのは、例えば、「～したる」とか「～けり」のような語調を受け入れられなかったこともあるのですが、そんな甘いレベルではなくて、生理的に受け付けなかった表現が点在していたからです。

卑近な例をあげますると、高校生のときの授業で学んだ『枕草子』の「うつくしきもの」にある、この行（くだり）です。ちなみに「うつくしき」というシク活用の形容詞を現代語訳すると、「かわいらしい」という形容詞なります。

「すずめの子の、ねず鳴きするに踊り来る。」

違和感があったのは「ねず鳴きする」というところ。

現代語訳をすると、

「雀の子が、人がねずみの鳴きまねをすると、踊るようにしてやってくること。」

となります。

擬声語を使うと、もっと親しみやすくなりますね。

「雀の子が、人がチューチューとねずみの鳴き声をまねると、雀が踊るようにしてやってくること。」

ちなみに、平易にしようとするほど文字数が増えていくことに気づいていただけますでしょうか。古文の文章、とくに名文は本当に無駄がないのです。これが古文のすごさでもあり、名文ゆえの極限まで単純化されているところが、現代人に難解と感じさせるところでもあるのです。

清少納言

まず古代日本語には「チューチュー」というような擬声語すらないのです。

さらに、ないものが３つあります。
１つめが「ん」という表記文字です。「ん」は撥音便といいます。日常的な会話で発音していたそうですが、その発音に当たる表意文字は、江戸時代になるまでありませんでした。

２つめが「っ」の促音便がありません。
３つめにないのがは「イ」音便です。

ですから、いざ書いて表現するとなると「読んで」は「読みて」、「走って」は「走りて」、「咲いて」は「咲きて」とするしかなかったのでしょう。

現代語という視線からだと擬声語・擬態語がないなんて、なんて不自由なんだとなりますが、古代日本語の視線からだと、そもそもないわけですから、「読みて」・「走りて」・「咲きて」と書くことに、当時の人々は不自由さを感じていなかったはずです。

ところが、勉強不足の極めつけみたいな高校生だった当時のワタシなので、「現代語目線」すら怪しいものですから、「古代日本語目線」なんていう発想すらできません。

そんな思考回路だった当時のワタシにとっては、撥音便も促音便もないなんて日本語として受け入れられないという頑（かたく）なさで古代日本語の受け入れを拒否したとしても、何ら不思議ではなかったのですが、それがいい年になるまでそのままの状態でいながら生徒さんの指導をしていたのですから、今からすると冷や汗ものです。

それでも、そんなワタシに初めて転機が訪れたのです。

小人数で集団一斉指導をしていた時代に（ワタシが40歳代のとき）国語の講師が休んでしまったので、急きょワタシが『平家物語』の「敦盛の最期」を教えなければならなくなったのです。

平敦盛

現在でも中学２年生の２学期に、「敦盛の最期」の段から他の段に入れ替えられている教科書が多いものの、『平家物語』に触れることは変わっていません。

塾を開業したのは28歳のとき。それからずっと古文の指導は避けてきました。

お金を戴いて指導をさせてもらっている責任のある立場に身を置きながら、なお古文が受け入れられなかったのです。そのワタシが水際まで追いつめられたわけです。もっと大げさな言い方をすれば、正に「背水の陣」。

授業自体の責任は無事に果たせたのがきっかけになって、ちょっとだけですが、古文に気持ちを開きかけました。

語調や文体に対する違和感は相も変わらずあったものの、その内容に心を惹かれかけたからです。でも、惹かれたわけではなくて、「惹かれかけた」だけでした。なぜなら、所詮は「業務処理」レベルの意識だったからです。

とりあえずその場はしのげたという意識が７割ほどを占めていたのでしょう。

オフクロ様はワタシが42歳のときに病でこの世を去りました。63歳になる手前でした。実は来年、ワタシがその63歳になります。

歴史が大嫌いだと、高校３年生のときに歴史の先生に、厚かましくもふてぶてしく言い放ったワタシに、

「歴史はな、40歳を過ぎてから勉強しなおしてみなさい。おもしろいぞ！」

当時17歳。それから23年後に先生がおっしゃったとおりになり、今や「どっぷりの古代史ファン」を自称し、戦国時代も近代史も現代史も「おもしろい」のです。当時の先生のお言葉を拝借するなら、

「古文は60歳になってから勉強しなおしてみなさい。おもしろいよ！　日本語の妙のとりこになるよ！」

となるでしょうか。

『源氏物語』は『枕草子』と並んで世界最高峰の文学作品として世界的に認められていてますが、試しに、江戸時代に書かれたもの（例えば本居宣長や松平定信が書いた論述文や日記文）を読んでから、『徒然草』を読み、続いて『枕草子』を読むという、いわゆる、江戸時代から鎌倉時代を経て平安時代へと逆行すると、興味深いことに気づかされます。

江戸時代（近世）の文体や語調が明治文体を飛び越えるというやや乱暴なとらえ方になるけれど、どことなく現代文に近くて、何となく大意をとらえられるのです。

ところが、時代が古くなほどに、現代語とのギャップ感は広がっていき、今から1000年以上前の古代日本語となると、その時代のことをある勉強しておかなければ、ただ難解な存在でしかありません。

歴史的な背景のひとつとして、生活習慣もさることながら、厳然とした階級社会で生きていた当時の人々、ことに貴族社会の人々が書いた作品が現在にまで残されているわけです。

『枕草子』といえば、

「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。」

というように、ほのぼのとしていて、どこかやんわりとした印象しか与えないのですが、全部で323段（能因本）あり、小中学校の教科書では取り上げられないと思われる段がたくさんありますし、高校の教科書に取り上げられる「にくきもの」の中にも、「にくきもの（イラッとくる・ムカつくもの）」があまりにも多くて、中には「取るに足りない賤しい身分の者」という差別的な表現も堂々と書かれているところや、その他にもあまりにも生々しい表現の部分は省かれていますから、小中

高生の間は『枕草子』の本来の姿は知ることができないかも知れません。

できることなら古文には触れないで現代国語（現代文）の指導を進めていこうと思ったのが、55歳くらいのときです。でも、ナニモノかがいたずらをするのですね。あろうことか、高校生から古文の指導オファーをもらったのです。頼られたからにはイヤとは言えない性分なのです。これが２度目の水際。

「そろそろ覚悟を決めよ。」

と、そのナニモノかに言われたような気がして、

「現代文も古文も同じ日本語なのだし、古代史ファンとしては古文が必要になってくるだろう。」

おそらく年齢を重ねたことでこういう思考ができる意識のレベルになっていたこともあって、真摯に向き合ってみようと思ったのです。ワタシが35歳くらいのときでしたか。

「『源氏物語』がエエなぁ〜」

と感慨深げに言うオフクロ様に、

「平安時代のハーレクィーン・ロマンスやろ？　そんなん、どこがエエんか分からんわ。」

『源氏物語』について何も知らなかった当時のワタシが発した言葉で、瞬間的に大げんかになったのです。それにしても現代語訳もなしに原文を読んでいたオフクロ様。今から考えたら、手紙を書くとか何か書類を書くとか、いわゆる「書くこと」にはからっきしダメだったのに、読む方にかけては高い語彙力があったのだなと感服ものなのです。

ちなみに、ハーレクィーンのシリーズは現在も年間400冊もの新刊が発刊され続けていて、70年もの歴史があるそうです。大抵の内容は、「働く女性がむかつく金持ちの男性に見初められるものの、なびかず反目すます。それでも最終的にお互いに惹かれ合い、気づいたら結婚している」というノンストレスのハッピーエンドというワンパターンであることは変わりないようです。

オフクロ様と大げんかになった当時から「ハーレクィーン・ロマンス＝ワンパターンの俗っぽい小説」というのが世間一般の評判でした。ファンの方がいらっしゃったら、ごめんなさい。その方々の名誉のために申し添えると、現在では恋愛小説だけでなくて、さまざまなジャンルの小説が発刊され、発展しつづけているそうです。

それにしても、天下の『源氏物語』を平安時代の「ハーレクィーン・ロマンス」だという認識だったのですから、当時のワタシは浅はかさの極みだったのですけれど、ここまでくると、「若気の至り」ではすまされないかも知れません。

で、そのワタシはというと、現在62歳で『枕草子』（能因本）を現代語と照らし合わせではあるけれど、読んでは楽しみながら、『古事記』と『日本書紀』を現代語訳の補助なしで原文を読んで理解できるようになることを目標に、勉強しています。

オフクロ様は、同時代の対向する位置にある『源氏物語』を読んでいました。

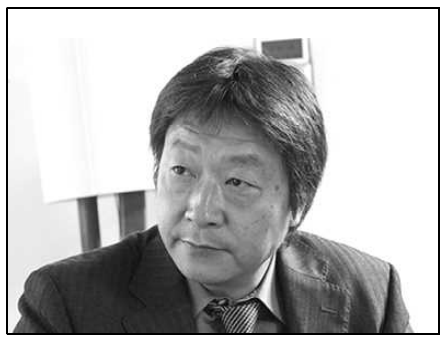
母と子で、当時、紫式部と清少納言で、定子（ていし）と彰子（しょうし）で、藤原道長と藤原伊周（これちか）で対向し、更には対抗でもしそうな位置にあるものを読んでいるのですから、親子って不思議だなと思いますね（紫式部と清少納言と彼女たちの背景については、現在研究中です。言語化できそうになりましたら、ご紹介します）。

ちなみに、ワタシを『枕草子』に釘付けにした人物は、ドナルド・キーン先生です。彼の著書『日本文学史』の第三巻の初めの章で、「清少納言と『枕草子』の概説を主軸に随筆という分野について語られます。

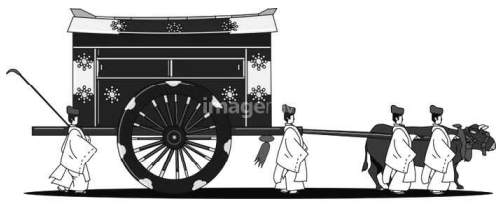
そして次の章で「物語」はいかにして生まれたのか、『竹取物語』の不可解なまでのリアルさを主軸に話が展開され、次の章の『源氏物語』の概説へとつなげられていきます。

2

その概説を読んだり、論理エンジンで高名な出口汪（ひろし）先生が分かりやすく高校生に解説した書籍を読んでもなお『源氏物語』には手を出せずにいます。


出口汪氏

『源氏物語』の存在は、ワタシにとっては、それほどに遙かな存在なのですれど、『枕草子』も自分が思っていたよりも難解なので、もしかしたら、とんでもない「怪物」に手を出したのかも知れないという想いと共に、それでも理解を進めることができれば、古代史への理解も深まるのではないかという想いをいだきながら、わずかなあきらめ感と大きな期待感の間を漂っています。



入試制度　事（こと）始め

「先生、ナンで入試なんかあるのん？」
「誰がこんなこと決めたん？」

さて、誰がいつ決めたのでしょう？

入試制度の事始め。正確には試験というものを登用したのは誰で、いつ始めたのかというと、聖徳太子が日本の官僚機構を構築するために、随王朝の科挙という制度にならい、冠位十二階の制を定めたことによるらしいです。

それまでは地方豪族などの権力者の子どもたちがそのまま親の後を継いで権力を保持できたのです。いわゆる世襲制度ですね。ところが、それだと人員に限りがあるので、官僚機構について先細る不安があるわけです。

潮の流れが速いことから日本海を渡って最も近い大陸の国への行き来をするだけでも苦心を強いられて、無事に対岸へ上陸できたとしても移動手段のほとんどは徒歩の時代で、ボタンを押すだけで何千キロメートルも離れた地点へ殺傷能力の高いモノを対抗相手の国に飛ばせる物騒な現代と比べれば、さぞやのんびりした時代だったと思われがちですが、実際は、現代とあまり変わりなかったようです。

朝鮮半島には高句麗・百済・新羅という国だけでなくて小さな「くに」が群雄割拠し、中国もまた周囲には恐ろしい騎馬民族がわんさかといて国境破りは日常茶飯事だったし、その飛び火がいつ日本にやって来るか分からない。

ご周知の通り日本は火山国です。朝鮮半島や中国にも大変高い山や山脈はあるものの火山がありません。

ですから、日本は縄文の昔から火山の噴火や地震、短くて流れの速い川の氾濫など、あらゆる災害と共に生活してきましたが、その代わりに恩恵も受けてきたのです。その中でとりわけ莫大な利益を得ることができた当時の貿易品のひとつに「朱」がありました。

現在は化学合成で作ることが出来ますが、当時は鉱脈のある場所でしか採ることができない鉱産資源のひとつでした。

朱は水をはじくため、神社仏閣や宮殿の柱などの塗装に使われます。つまり経年劣化を防ぐ唯一の塗料だったため、仏教国であり独裁国家だった朝鮮半島や中国の王朝にとって、日本と同様にこの朱が不可欠でした。ところが、火山がないところには朱の鉱脈がないから、日本から高いお金を払ってでも輸入しなくてはならないのです。それでなくても当時は莫大な利益を得ることができた鉱産資源が豊富にあり、おまけに（当時の日本は）良質な鉄鉱石も採掘されたのです。その日本が中国に朝見と称して足しげくやって来てくれるし、卑弥呼の時代から自分達の保身の後ろ盾として頼ってやって来るのでこのままずっと中国の属国でいて欲しかったのです。そうすれば、ちょっと煽るだけで自分達の欲しい鉱産資源などを喜んで持って来てくれる。

聖徳太子の時代になって「日出るところの天子」とあるように「日本」という国号にしたという説が強いのですけれど、それ以前は「倭国」でした。

「漢委奴国王」印。中国の漢王朝が日本の奴国に贈ったものといわれていますが、ワタシは高校生の頃からずっと引っかかっているのです。

「倭国」へ贈るのであれば、「漢倭国王」でなければならないはずなのに、「倭」ではなくて「委」となっていて「にんべん」がないのです。単に刻印を彫る職人が字を読めなかったために間違えたという説から始まって諸説あるのですが、中国の王朝は古代から日本を「東夷（とうい：東の野蛮人）」と呼んでいた経緯があるので、属国と認めてやるということで、「人に非ず。奴隷である。」という意をこめて、わざと「にんべん」を外したという説が有力です。

大変頭脳明晰だった聖徳太子という当時の為政者のことですから、このままだとずっと属国の認識でいられることへ大きな危機感を持っていたのです。だから、日本を東方の日が昇る国とし、その王だから「日出るところ国の天子」、日が沈む西方の王だから「日没するところの天子」として、対等な外交をする気概で小野妹子を筆頭とする遣隋使を隋王朝に送り込み、隋がなぜ強大な帝国として成り立っているのかを探らせたのです。

そこで浮上したのが科挙という制度です。人材を選出するためにレベルの高い課題を用意して希望者に挑ませることで教育レベルが格段に上がる。

強い国力を保つには先見の明が利く人材が必要だし、外交を有利に運び続けていくためにも交渉に長じた頭脳を持つ人材がいる。

教育の大切さを聖徳太子が気づいたからこそ、冠位十二階の制をつくり、明日の日本のことを考えなくても自動的に権力者になれる世襲制をやめて、もっと広い範囲から優れた人材を集める

方法を考え出したのは自明の理なのです。

実はこの聖徳太子ですが、結構謎の多い人物で、「実在しなかった」という説があります。正確に言うと、冠位十二階・憲法十七条（十七条の憲法）・遣隋使派遣などの、今後の日本という国の運命を左右するほどのずば抜けた先見の明をはたらかせたこれらの功績を残した人物は実在しているのです。なぜなら、実在した人物がいたからこそ功績を残せたわけですから。でも、その人物は「聖徳太子」と呼ばれていなかったのではないか、というのです。

現に、この人物に対して「聖徳太子」と名付けたのは聖武天皇なのです。いにしえの世に、神のごとくの先見の明をもって国家の基礎を気づきあげたほどの「聖なる徳を持った人（天皇家の人なので『太子』）がいたらしい。その人を『聖徳太子』と呼び、その人物にあやかって自らを「聖武」と称そう」ということで、「聖徳太子」という名の人物が作られ、「聖武」という称号も作られたといわれています。

聖徳太子の別名は「厩戸皇子（うまやどのおうじ／うまやとのおうじ）」。厩の出入り口付近で母である穴穂部間人皇女（あなほべのはしひとのひめみこ）」が産気づいたことからこの名があるとされています。

このお話、何かと似ていませんか？

イエス・キリストのお話。

諸説紛々なのだそうですが、イエスは馬小屋の中に積まれているのワラの上で生まれたという説があります。

みなさんは「渡来人」という言葉を聞かれたことがあると思います。最もなじみのある「渡来人」といえば、仏教を伝えた朝鮮半島の人々でしょうか。

仏教の伝来も諸説あって、一般的に教科書に書かれている年号は538年ですが、宗派によって多少のズレがあるので、５世紀から６世紀にかけてという認識で正しいのでしょう。

実は「渡来人」というのは、朝鮮半島（おもに百済と新羅）から日本に渡ってきた人だけでなくて、もちろん中国大陸から現在の九州地方にやって来た人々もいれば、遠くは現在のイスラエル辺りからやって来た人もいるのです。

その数は年間１万人。

当時（縄文から弥生）の日本人（倭人）と言われている人は精々26万人程度だったそうですから、ものすごい人数でです。

実は縄文時代は15,000年ほど続いたといわれていて、教科書では稲作は弥生時代に渡来人によって伝えられたとされていますが、実際には縄文時代の末期には方々で稲作が行われていました。

中国大陸や朝鮮半島では群雄が割拠し、それらの部族同士の勢力争いが絶えず、その難から逃れるために小さな舟を海洋に出して海流に乗り、命からがら日本にたどり着いたのも「渡来人」なのです。この中には古事記に登場するヤマタノオロチ退治で有名なスサノオなども含まれるとされます（詳細は割愛します。古代史ファンのワタシなので、書き始めると止まらなくなり、結果的にエライことになります）。

この「渡来人」たちの中には技術者もたくさんいて、鉄鉱石の採掘の仕方、稲作の仕方、機織（はたお）りの仕方など、当時の最先端の技術を日本にもたらしてくれたのは事実で、これらの技術集団（現代のエンジニア集団）のことを倭国の為政者たちは「物部（もののべ）」と称したのです。この人達が、仏教国とするのか神道の国とするのかを、聖徳太子の父親である用明天皇の死後に争うことになる、仏教方が百済からの渡来人の二世である蘇我氏であり、神道方が物部氏であるのです。

こういう歴史的な流れがあって、今日の私たちが想像する以上に、日本はにぎやかで国際色豊かだったことから、世界中の情報が為政者たちに舞い込んできていたとしても、何ら不思議なことではないのです。

ですから、古事記の中にも聖書によく似た部分があるとされますし、「聖徳太子」という謎多き人物の出生にしてもイエス・キリストとどことなく似ていたりするのも、突拍子なことではないのかもしれません。

「聖徳太子」の正体は未だに分かっていませんが、聖武天皇がおっしゃったように、「いにしえに、神のごとくの先見の明をもった徳高き賢き人がいた」のは確かで、当時の世界情勢を知り尽くし、脆弱な倭国から強い日本国に生まれ変わらせるために、その当時の日本から見れば世界最先端だった隋王朝から治世の方法を学び、教育の大切さを痛感したからこそ、試験制度を通じて官僚機構を構築したのです。

さて、現代の学校の授業は、こういった先見の明を持つ賢者にふさわしい内容で進められているでしょうか。試験を受けるための予備校的な存在になってはいないでしょうか。

ホリエモンこと堀江貴文さんが、こんなことをおっしゃっています。彼らしいちょっと過激な発言ですが、ワタシ個人としては腑に落ちる部分があります。

「学校の授業ってつまんないんですよね。人それぞれの想いや考えがあるのに、ナンで一斉に右向け右や左向け左をさせるんですかね？」

小学校の授業が退屈で仕方がなかったワタシ。小学校でも中学校でも高校でも授業時の板書をノートに書き写しをさせられても、家に持ち帰ってみたところで、その日の授業すら脳裏に再現されない。「それは己れがちゃんと聞いていないだけだろ？」というのが親父様のお決まりのせりふでした。

それに対して、

「ホンマにそうなんか？」

というのがワタシでした。

要点だけを板書されたものを書き写しさせられて、それを見た子たちの中で一体何人の子どもたちが彼らの脳裏で再現させられるのだろうか？

この疑問が小学校の頃からずっとあって、今でもワタシの中でくすぶっています。

学校授業を入試のための予備校授業としないために、授業を実のあるものにするために、あなたは、どんな方法があなた自身ににふさわしいと考えますか？

問題集の選び方

中学３年生の生徒さんたちにとって９月は、そろそろクラブ引退の時期でしょうか。

学習内容のレベルが上がったことで入試レベルは当然のこととして上げられますから、校内の実力テストや模擬テストのレベルもアップさせられるわけです。

入試に挑む心得として、毎年言っていることがあります。その対象学年は３年生ではなくて２年生です。理由は３年生の４月では遅いからです。

心得とは気構えのことです。これから挑むことに対する気持ちをくみ上げることです。

英語で「決心する」という意味の単語に「decide」がありますが、個人的には熟語の方が合点がいきます。

「make up one’s mind」

「one’s」には所有格の単語が入ります。いわゆる「my/your/his/her」などです。

単語そのものの意味だけで和訳すると、「～の心（気持ち）を作り上げる」となりますが、合理的だなと感じさせられます。

このほかにも、日本語の「会いに来きてよ」は英語では「come and see」となりますが、これも合理的な表現です。だって「来なけりゃ会えないじゃん」ということで、「まず来てよね。それから会おうよ」ということから、「来て会おうよ」という語順になっているのです。

お話を戻します。

公立小学校からそのまま公立中学校へ進んだ生徒さんにとっては初めての大きな経験になります。日本だけでなくて法治国家である以上、何か資格を取得したければ試験はつきものです。18歳になって運転免許を取得する際に受ける試験は最も易しい国家試験ですし、教員を目指される人であれば教員採用試験という地方公務員試験を受けて合格しなければなりません。

このように考えると、世の中は試験だらけなのです。

それにしても、ネット（バーチャル）書店でも紀伊國屋やジュンク堂などのリアル書店でも、よくぞこれだけの本があるなと驚愕させられるほどです。

ちなみに、日本国内では年間に72,000冊が新刊として世に出されています。そしてその全てが、国立国会図書館に保存されます。もちろんジャンルは問とわれません。ただしこの中には雑誌は含まれていないので、それも漏れなく保存されるので、膨大な量になります。

参考書や問題集に限ったとしても、ものすごい分量で、書店にとって今いちばん売りたい本は、「どんな本が良いのかな？」と見て回る人の目に留まりやすいように、本棚に立てて収めずに、選ぶ人が目を落としたところに平積みにされます。

生徒さんから「どんな問題集（参考書）がオススメですか？」と尋ねられることも少なくないのですが、大抵はこのように答えています。

「これという自分に合いそうなものを１冊だけ選んで、それがボロボロになるまで繰り返すのが良いですよ。」

では、あなたにとって「これ！」と思う１冊を氾濫する中から、どこをポイントに選び出でば良いでしょうか。

生徒さんには次の２点を繰り返して言うようにしています。

① オウムの羽のような色とりどりの問題集（参考書）は避けようね。そんなの、黒・赤・青の３色くらいでじゅうぶんです。

② とくに問題集の場合、ほとんどの人って答が合っているか間違っているかにしか関心がないのだけれど、オイシイのは解答解説冊子にあるって気づいてますか？

とくに②ですが、問題集に限らず書籍には採算性がついて回ります。１冊を何ページにするか、何色刷にするか、写真や図を何枚入れるかなどの条件によって値段が設定されます。

ですから、問題集に掲載される問題も無限というわけにはいきません。完成度が高くてロングセラーの問題集ほど作成者の情熱が注ぎ込まれている。でも規格上、掲載できない内容がある。その思いの丈を解答冊子の解説に注ぎこむのです。

つまり、解答解説冊子が分厚くて、解説が懇切丁寧なものを選ぶ。これが大きな決め手です。なのに、ほとんどの生徒さんって解答だけを見て解説を読まないのです。勿体ないでしょ？

その前に、大きな条件がありますね。そんな完成度の高い問題集を、数多ある中から選び出すためには、「こんな問題集があったらイイな」という、あなたの頭の中にかなり明確なイメージが必要なのです。

その明確なイメージを抱くには、それなりに勉強しておかなきゃ、いざ書店の本棚の前に立った瞬間に、あなたの脳裏のイメージは簡単に破壊されてしまいますので、要注意。

一度、ある個人書店で、わが子に合う問題集を選ぶ父親の振りをして、数冊選んでレジに持っていったところ、

「あなた、塾の先生でしょ？」

と、ものの見事にバレたことがあります。その理由を伺うと、

「本の選び方の速さが違うんです。」

ワタシには俳優の素質が全くないことが、書店の店主に証明されました。

宇治拾遺（しゅうい）物語

4

今は昔、遣唐使（けんとうし）の、*1もろこしにあるあひだに、妻をまうけて、子を生（うま）せつ。その子いまだいとけなき程に、日本に帰る。妻に契（ちぎ）りていはく、「異遣唐使いかんにつけて、*2消息（せうそく）やるべし。またこの子、乳母はなれんほどには、むかへとるべし」と契りて、帰朝しぬ。①［A］、遣唐使のくるごとに、「消息やある」と尋（たづ）ぬれど、あへて音もなし。［B］、おほきにうらみて、この児（ちご）をいだきて、日本へむきて、児の首に、「遣唐使それがしが子」といふ札を書きて、ゆひつけて、②「宿世（すくせ）あらば、親子の中に行き合ひなん」といひて、海になげ入れて帰りぬ。

［C］、あるとき難波（なには）の浦のへんを行くに、沖（おき）のかたに、鳥のうかびたるやうにて、しろき物見ゆ。海ちかくなるままに見れば、童（わらは）にみなしつ。あやしければ、馬をひかへてみれば、いとちかくより来るに、四つばかりなる児の、しろくをかしげなる、波につきてよりきたり。馬をうちよせて見れば、首に札あり。「遣唐使それがしが子」と書け③り。さは我（わ）が子にこそありけれ、もろこしにていひ契りし④児を問はずとて、［D］が腹だちて、海になげ入れてけるが、しかるべき縁（えん）ありて、かく魚にのりてきたるなめりと、あはれにおぼえて、いみじう⑤かなしくてやしなふ。遣唐使の行きけるにつけて、このよしを書きやりたりければ、［E］も、今は⑥はかなき物に思ひけるに、かくと聞きてなん、希有（けう）のことなりと、よろこびける。

さてこの子、おとなになるままに、*3手をめでたく書きけり。魚にたすけられたりければ、名をば魚養（うをかひ）とぞつけたりける。七大寺の額ども は、⑦これが書きたるなりけりと。

（『宇治拾遺物語』）

*1もろこし＝中国。
*2いとけなき＝幼い。
*3手＝ここでは文字のこと。

新中学問題集３年生発展遍

８月号で次回に解説しますと書きながら、またしても失念しておりました。『宇治拾遺物語（うじしゅういものがたり）』は、鎌倉時代前期（1212年～1221年）に成立と推定される日本の説話物語集です。編著者は残念ながら不明です。説話ですので、ことの真偽はともかく、不思議な話、滑稽な話を中心に展開されていて、比較的短くて、当時の人々が現代人に比べていかに神仏のいわゆる目に見えぬ力を信じていたのかをうかがえるという点でも、興味深いものがあります。

〈現代語訳〉

今ではもう昔のことです。ある遣唐使が唐にいる間に結婚し子どをもうけました。しかし、子どもがまだ乳飲み子だった（のと、渡航には危険が伴う）ため（妻子を日本に連れて行くことができないので）、

「日本に着いたら、唐に向かう別の役人に自分の消息を（あなたに）教えるように伝えます。また、その子が乳離れする頃には必ずあなたたちを迎えに来ます。」

そのように言って日本に帰っていきました。

その後、日本からの遣唐使が着くたびに夫の消息を尋ねますが、誰ひとりとして知りません。それに激怒した妻は、

「前世で父親と縁があるのなら、今生でも魂の縁はあるはずだ。だから父親とうまく巡り会えるだろう。」

日本の方を向きながら、そう言って毛布にくるみ首に「遣唐使何某（なにがし）の子」という札をかけて海に投げ込みました。

あるとき（日本の）難波の浦にいたある役人が、沖の方で鳥のように波に浮き沈みしているものを見つけました。よく見てみると、白いもののようで、岸へ近づいてくる様子を見ているうちに、それが子どもであることが分かりました。不審に思い、（岸辺へ）馬に乗って行ってみると、４歳くらいの、色白でかわいらしい子どもでしたので、岸にたどり着いたときに首につけられている札を見ると、「遣唐使何某かの子」と書いてありました。

「この子はわが子であったのか。唐で迎えると言って約束した子を、尋ねてこないといって、母親が腹を立てて海へ投げ入れたのか。それなりの縁があってこうして魚に乗ってきたのであろう。」

と胸を打たれて、たいそういとおしく思い育てました。

唐に向かう別の役人にことづけをして、このことを書いて送ったところ、母親も、今は死んだと思っていたのに、これこれと聞いて、滅多にないことだと喜びました。

さて、この子は、大人になるにつれて、文字を上手に書きました。魚に助けられたので、名を「魚養（うおかい）」とつけたのです。南都（奈良）七大寺の額などは、この人が書いたのだということです。

＊　＊　＊

「拾遺」というのは、残された古い話を拾い集めたものという意味ですが、それにしても、ものすごい話です。現代なら世にまれに見る残虐な事件としてSNSなどを介して、あっという間に世界中に拡散されることでしょう。それに、そもそも約束をしながら長い間忘れている何某というこの男は、イマドキで言うなら「DOQ（ドキュン）夫」であり、母親も母親で、いくら激昂したからと年端もいかぬわが子を海に投げ入れるなんて言語道断。おまけに、幸いにも岸辺に無事にたどり着いた子どもを見て思い出し、別の役人にことづけた文面に詳細を書くなど、「お前、ちゃんと覚えてたんかい！」と、ツッコミどころ満載な内容です。

別の見方をすれば、わが子の無事を聞いてたいそう喜んだ母親については、ほんとうにあっさりとしか書かれていませんが、葛藤の挙げ句に海に投げ込んだとはいえ、前世での魂の縁があるなら、何とか今生でもその縁を途切れさせないでくださいと神仏の力を強く願ったことも想像されます。

古文にはこういった、ややオカルト的なお話が結構な数で残されています。

オカルト話ということで書きますと、日本三大怨霊といえば、崇徳天皇・菅原道真・平将門の怨霊をさしますし、世に有名な「番町皿屋敷」・「四谷怪談」・「牡丹灯籠」などの怪談も、ずっと語り継がれてきています。あるいは、奈良県葛城にある一言主神社の主祭神である一言主という女神様は、役行者（えんのぎょうじゃ）から、山深い紀伊山地を一跨（ひとまた）ぎで和歌山の本宮からこの葛城の地までを岩の橋を持ち前の神通力でもってつなぐよう依頼を受けたのに、自分の容姿が良くなくて人前に姿を見せたくないという理由で仕事をサボった結果、役行者を怒らせてしまい、この地に封印されてしまった、などという話も残されています。

内容の真偽とかツッコミどころ満載のところへの議論はともかく、昔の人々が現代人よりも目に見えない不思議な力を強く信じていたことは確かでしょう。また、枕草子の「にくきもの」を読んでいて感じさせられるのは、対人関係とか生活感に関しては現代と何ら変わりがないことです。

当時とは比べものにならないほどに科学が発達した今日でも、年末年始や受験前には神社仏閣への参詣をしますから、古来からの目に見えぬ不思議な力への畏敬の念は、日本人のＤＮＡとして連綿とつなげられているのでしょう。

それにしても、もし清少納言や紫式部の時代にスマホがあってＬＩＮＥなどのＳＮＳが使えたとしたら、どんな人とどんなやり取りをしたのかしらと考えるとき、現代人と大して変わらないのではないかと想像すると、古文もそんなに遠くて難しい存在ではないように思えてきます。

〈編集後記〉

今回は随分と古典色と歴史色が強くなってしまいました。正直なところ、今回は３日ほどであわてて編集したのです。と申しますのは、２年ほどの期間がかかりましたが、いよいよ著作の出版が現実味を帯びてきていて、出版社との打ち合わせと原稿の最終チェックに時間を割いていたからです。まさかこの年齢になって本を出すなんて、お話を戴いたときにはびっくりしました。それでもなんとか脱稿できたのが今年の２月で、最終チェックのために読み返してみると、最初の部分は硬い表現で、何となく取っつきにくくて難解なところがあるような気がし、文章をかく難しさ、読み手に伝える難しさをあたらためて痛感させられています。で、一応書籍名は〈塾ごっこ～「隙間」を発見すると勉強がのびる～〉に決まっております。早ければ10月中に、遅くとも今年中には発刊予定とのことです。仔細は追ってお知らせします。